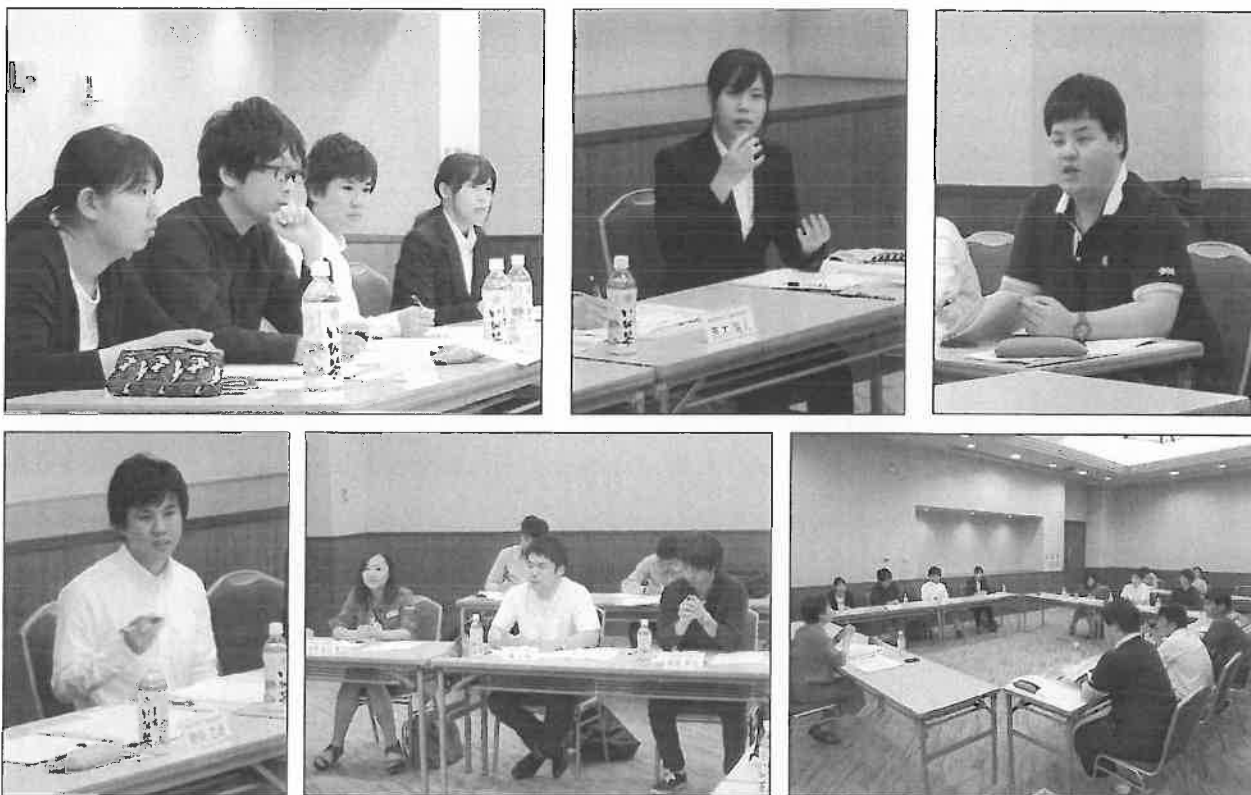


岐阜県障害者施策推進協議会「若者懇話会」結果概要



【概 要】

1. 日 時：平成28年6月1日（水）16：00～18：30（予定を1時間超過）
2. 場 所：じゅうろくプラザ 5階 小会議室2（岐阜市橋本町）
3. 出席者：12名（詳細別紙）

- 佐藤八千子 岐阜県障害者施策推進協議会委員・岐阜経済大学地域経済研究所特別研究員（座長）
- 岐阜大学・岐阜経済大学・中部学院大学・東海学院大学の各大学3,4年生（11名）
（出身：岐阜県7名、愛知県3名、長野県1名）

4. 概 要

- 県の障がい福祉施策に若者の考えを取り入れるため、県障害者施策推進協議会に「若者懇話会」を設置し、県内大学で福祉分野を学ぶ学生から意見を伺いました。
- 若者懇話会では、4月に施行された「岐阜県障害のある人もない人も共に生きる清流の国づくり条例」の「共生社会実現施策（啓発、教育、交流）」と「若者への啓発方法」をテーマに行いました。
- 参加学生は、家族に障がい者がいる、幼い頃から障がい児と関係が深い、ボランティアやサークルで障害者施設等を訪問、同施設でアルバイトをしているなど、障がい者との関わりが深い方ばかりで、こうした経験に基づき、普段感じていることや考えていることを交えながら、活発な意見交換をしていただきました。

【主な意見】

（共生社会実現施策）

- 障がいについて、知る機会が少ないので、意欲がないと学ぼうという気にならない。
教えること（教育）が重要。
- 愛知県ではクラスに障がい児がいて、障がい者が身近であったが、岐阜県は幼い頃から障がい者と接する機会が少ないのではないか。
- 岐阜県でも障がい者との交流はあり、自分は小学校近くの障がい者施設で一緒にクッキーを作ったり、作業をしたりしたが、1回程度でその後の交流はなかった。
- 障がい児は別のクラスで、場所も人目につかないところ。普段の交流がないので、普通の児童が敬遠しがち。障がい者と関わりがない人は、関わりづらい環境にある。
- 小学生の運動会で、障がい児と一緒に縄跳びをしたが、子供のうちに障がい者と触れ合う経験をしておくと、障がいに対する理解が深まるのではないか。
- 目隠しをするなど、子供たちが障がいの疑似体験をする機会を設けると良い。障がい者の気持ち分かる経験を通して、将来障がいを自然に受け入れられる人の育成や社会づくりにつながっていくのではないか。
- 子供に興味・関心を持たせるには、真剣に教え込むだけでなく、楽しく教えることが重要で、教え方に工夫が必要。
- 親の障がいに対する理解が必要。子供が障がいについて調べたことを、子供が親に説明する機会があると良い。ひいては地域の福祉も向上するのではないか。
- 障がい者スポーツを通して理解を深めることもできると思う。例えば、障がい者スポーツを障がい者と一緒に行う授業（体育）を導入してはどうか。
- 歌を一緒に歌うなど、音楽を通じた理解促進が効果的ではないか。
- 大学で障がい者を理解する第一歩として、ボランティア活動を必須科目（単位）にしてはどうか。（岐阜経済大学では必須）。
- 疑似体験やボランティア活動を必須とするなどの取組みは、きっかけづくりとしては良いことだが、例えば、疑似体験で使った道具を引き続き子供達に使わせるなど、興味・関心を持った後に触れ合う機会や交流の機会、すなわち継続が大事ではないか。
- 福祉に関わる者として、自分から動くことも大事なことはないか。
- 地域外の特別支援学校にバスで通う児童のことを地域住民は知らず、児童は町内会の行事に参加できない。地域の人と交流できるスポーツ大会やフェスティバル等を地域で開催してはどうか。ひいては地域で助け合える環境もできるのではないか。

(ヘルプマークの普及啓発)

- FC岐阜のサポーターにチラシ等を配り、理解して貰う。
- 若者はSNS（フェイスブック、ツイッター等）を利用しているので、マスコットの「すけだち君」のアカウントを作るなど、SNSの活用が効果的ではないか。
- SNS以外にも大学構内にポスターを掲示することも効果的ではないか。
- 県や市町村の広報に小さくても良いので、普及するまで毎回掲載する。
- 障がい者施設でのイベントでチラシ等の配布や説明をしてはどうか。
- まずは学校の先生に伝えることで、学校で先生から子供、家庭で子供から親、親から周りの人へと順番に広がっていくのではない。例えば、授業の一部で教えるなど。

(若者への啓発方法)

- 義務教育の中で、共生社会とは何か、障がい福祉の授業を導入する。
- 障がい者と触れ合う機会が少ない、知らないことが課題。機会を増やすこと。
- 子供が育つ環境が重要。教員や保護者向けに障がい者を正しく理解して貰う研修等が必要。
- 若者への啓発も重要であるが、大人への啓発（研修）も重要。例えば営業職は、取引先に障がい者がいた場合、気持ちが分かり、効果的な営業ができるのではないか。
- 学校（小・中・高校・大学）に特別講師として障がい者に来てもらい講義してもらおうと良い。
- 大学の掲示板などを使って広報すると良い。
- 障がいを理解する学生がそうでない同じ年代の学生に伝えること、横の教えが重要。

【参加者の感想】

- 音楽やスポーツを通じた理解促進などの様々な意見や、他大学・違う学年の意見が聞けて大変勉強になった。今後の活動につながる。
- 県から色々と説明いただき、自分達の意見が言え、その意見が参考にしていただける凄く良い機会だった。参加して凄く良かった。
- まだまだ障がい者に対する理解は進んでいない部分がある。自分も支援していけるよう、今後色々と考えていきたいという思いが強くなった。
- 若者に啓発する難しさを感じたが、若者に上手く伝えられるのは若者。今後、自分ができるところを頑張っていきたい。
- ボランティア活動に対する意欲が沸き、興味も深まった。
- 一番多くの人に伝えられる方法が教育という意見に賛同した。ただ、教員ばかりに負担をかけるのではなく、スクールカウンセラー等学校関係者が教えるのも一案。
- 方法を考えるだけでなく、それが実行できるかが大事だと感じた。
- 僕達若者が発信していくと社会も変わっていくと感じたので、これから色々なことに自発的に挑戦して自分自身も変わっていきたい。

岐阜県障害者施策推進協議会「若者懇話会」参加者

(12名)

所属・役職・学年	氏名	備考
岐阜県障害者施策推進協議会 委員 岐阜経済大学地域経済研究所 特別研究員	佐藤 八千子	座長
岐阜大学 教育学部 3年	太田 優香	
岐阜経済大学 経済学部 4年	川戸口 晃平	
岐阜経済大学 経済学部 4年	中島 諒人	
岐阜経済大学 経済学部 4年	古川 将士	
岐阜経済大学 経済学部 3年	喜田 裕一郎	
中部学院大学 人間福祉学部 3年	榎並 貴斗	
中部学院大学 人間福祉学部 3年	楠 主税	
中部学院大学 人間福祉学部 3年	瀧澤 里江	
東海学院大学 健康福祉学部 4年	荒木 海人	
東海学院大学 健康福祉学部 4年	猪俣 広貴	
東海学院大学 健康福祉学部 4年	小川 紗枝	